

令和元年度
長岡市内遺跡発掘調査報告書

2020

新潟県長岡市教育委員会

例　　言

- 本書は、長岡市内で計画された開発工事に先立って実施した試掘・確認調査、開発工事中に実施した立会調査の報告である。
- 調査主体は長岡市教育委員会科学博物館である。
- 本文の執筆は、小林（1）、加藤（2）、山賀（3・4）、島居（5）、新田（6・7・8・9）、で分担し、編集は小林が行った。
- 遺物番号は遺跡ごとの通し番号である。
- 土層柱状図における■は遺物包含層を示す。
- 出土遺物や写真及び測量図面などの記録類は長岡市教育委員会が保管している。
- 現地調査から本書の作成に至るまで多くの方から御協力、御教示を賜った。記して御礼を申し上げる（五十音順・敬称略）。
株式会社植木組、小川工業株式会社、国際石油開発帝石株式会社、三島郡北部土地改良区、有限会社志賀測量、株式会社長測、寺泊年友集落、長岡市水道局、長岡市土木部道路建設課、長岡炭酸株式会社、長岡地域振興局、早川幸仁、寶徳山福荷大社

目　　次

1	令和元年度長岡市内遺跡発掘調査の概要	1
2	寺泊（年友）地区試掘調査	3
3	新保遺跡確認調査	8
4	江底遺跡確認調査	9
5	西片貝地区試掘調査	10
6	越路中沢地区試掘調査	11
7	飯塚原地区試掘調査	12
8	上並松遺跡隣接地立会調査	13
9	朝日遺跡隣接地立会調査	14



第1図　長岡市の位置



写真1　作業風景（新保遺跡）

1 令和元年度長岡市内遺跡発掘調査の概要

令和元年度に長岡市教育委員会による遺跡の本発掘調査はなかったが、試掘・確認調査は6件実施された。このほか、諸開発に伴う立会調査を10件実施した。なお、年度中に2件の試掘・確認調査と1件の立会調査が予定されている。本発掘調査は平成21年度をピークに平成25年度まで横ばいに進んだが、以降徐々に減少し、近年では本発掘調査に至るケースはほとんどない。また、昨年度増加した試掘・確認調査の件数は、今年度には減少した。一方、立会調査件数は増加した。調査原因をみてみると、県営ほ場整備事業のほか、市道建設・拡幅などの公共工事や既存建築物の解体や個人住宅建設など多岐にわたる原因による調査がなされてきている。

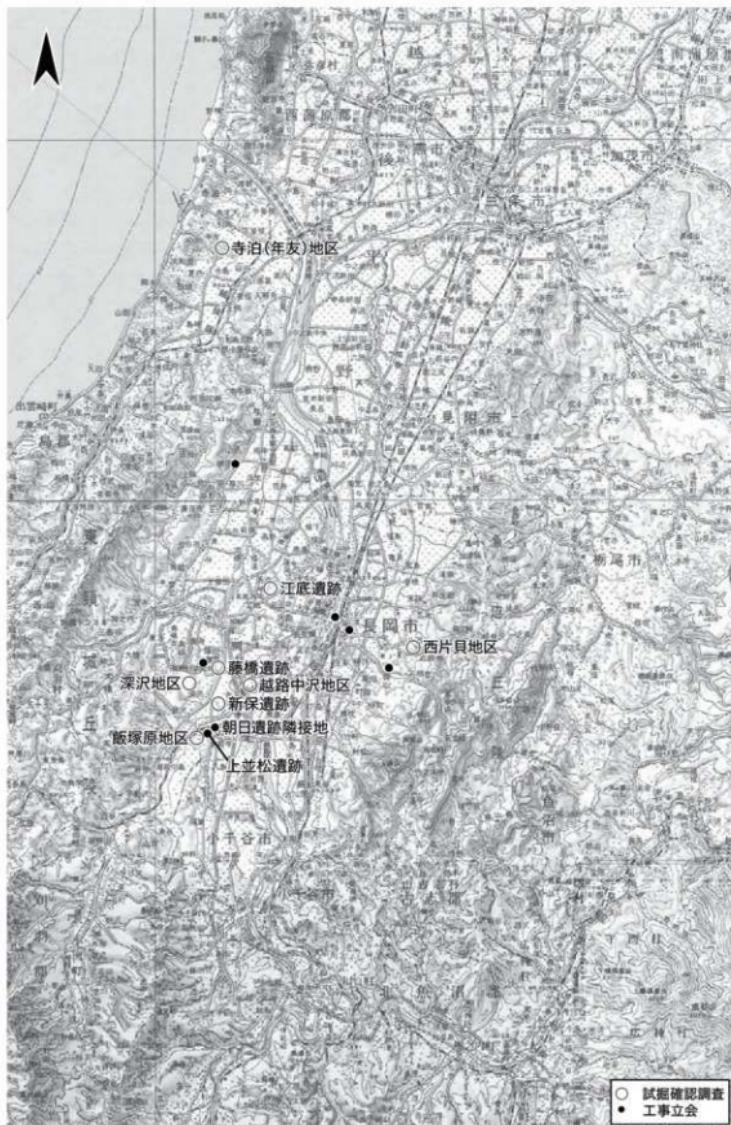
本年度実施した調査の結果について概観する。経営体育成基盤整備事業（年友地区）に伴う試掘調査では1基のピットと多数の土師器・須恵器が出土した。住居跡の検出には至らなかったが遺物の出土内容から平安時代の集落跡の可能性ある包蔵地として堤下遺跡と、古墳時代の遺跡として竹ノ沢遺跡を登録した。今後、事業の進展によっては本調査が行われることになるであろう。また、飯塚原地区では、土坑群と土器細片が出土した。それ以上の遺物などは見つかず、新規の登録には至らなかったものの、現況保存されている。その他の試掘・確認調査においては遺物・遺構を検出できなかった。

上並松遺跡と朝日遺跡の隣接地の立会調査では、少数の縄文土器片や石器が出土したが、事業において遺跡に影響がないことが確認されたため事業が進められる事になった。

今年度の調査では、新遺跡発見などは少なかったが、埋没地形・地質などに関する多くの知見が得られるなど、今後の調査に役立つようなデータが蓄積された。

第1表 令和元年度長岡市内遺跡調査一覧(本書掲載の調査はゴシック体で示した)

地域	地区	調査原因	結果など
寺泊	寺泊(年友)地区	県営ほ場整備事業	試掘 ピット・土師器・須恵器
与板	下稻場遺跡	急傾斜地崩壊対策事業	立会 遺構・遺物なし
長岡	新保遺跡	個人住宅建設	確認 遺構・遺物なし
	江底遺跡	市道建設	確認 遺構・遺物なし
	深沢地区	公園施設整備	試掘 ※3月調査予定
	藤橋遺跡隣接地	大学施設建設	立会 遺構・遺物なし
	長岡城跡	既存建築物解体	立会 遺構・遺物なし
	長岡城跡	既存建築物解体	立会 遺構・遺物なし
	西片貝地区	市道拡幅	試掘 遺構・遺物なし
	堅正寺遺跡	公園造成	立会 遺構・遺物なし
	長岡城跡	既存建築物解体・個人住宅建設	立会 遺構・遺物なし
	長岡城跡	個人住宅建設	立会 遺構・遺物なし
越路	藤橋遺跡	史跡内確認	確認 ※3月調査予定
	長岡城跡	既存建築物解体	立会 遺構なし・近世磁器
	長岡城跡	既存建築物解体	立会 ※3月調査予定
	越路中沢地区	市道建設	試掘 遺構・遺物なし
	飯塚原地区	駐車場造成	試掘 土坑・遺物なし
上並松遺跡隣接地	駐車場造成	立会 遺構なし・縄文土器・石器	
	配水管布設	立会 土坑・縄文土器	



第2図 令和元年度調査地 (1/250,000)

2 寺泊（年友）地区試掘調査

調査地 長岡市寺泊年友 954 番地ほか 調査面積 495m² (対象面積 660,000m²)
調査期間 令和元年 10月 1日～10月 30日 調査担当 加藤 由美子

調査に至る経緯 平成 29 年 1 月、新潟県長岡地域振興局農林振興部農村計画課（以下、「県振興局」）から長岡市教育委員会（以下、「市教委」）に、長岡市寺泊年友地内における埋蔵文化財の取扱いについて照会があった。これに対し市教委は、同地域には周知の遺跡が複数存在し未周知の遺跡の存在も考えられるため、開発に際しては事業着手前に埋蔵文化財の試掘調査が必要である旨を県振興局に回答した。平成 30 年 10 月、県振興局は令和元年度に事業申請が計画されている経営体育成基盤整備事業の寺泊年友地区について、市教委に試掘調査を依頼した。調査結果を工事設計に反映できるよう早期の計画が望まれたため、市教委は令和元年 10 月の稿引り後に試掘調査を実施した。

調査地の概要 長岡市寺泊年友地区は長岡市の西部、海岸線に沿って伸びる東頸城丘陵の内陸部に位置する（写真1・第3図）。年友集落は東頸城丘陵から内陸部へ羊齒の葉状に派生する小丘陵の裾部を居住域とし、眼前の谷部を農耕地として利用する。集落の東側には信濃川大河津分水路が開削されるまで二级河川・島崎川が新潟平野へと北流していたため、河川改修で流路が変更された現在も「七曲り」の地名とともに蛇行する自然堤防が残る。島崎川は河床勾配が少なく流速も緩やかだったため、明治期までは内水面交通路として盛んに利用された。信濃川から出雲崎港へ物資を運ぶルートとして、多くの川船が行き来していたという。一方、河床勾配の少なさゆえ、大雨時にはたびたび排水不良を起こし、年友を含め流域一帯の田畠や集落は、しばしば湛水の被害に悩まされた。



写真2 調査地全景



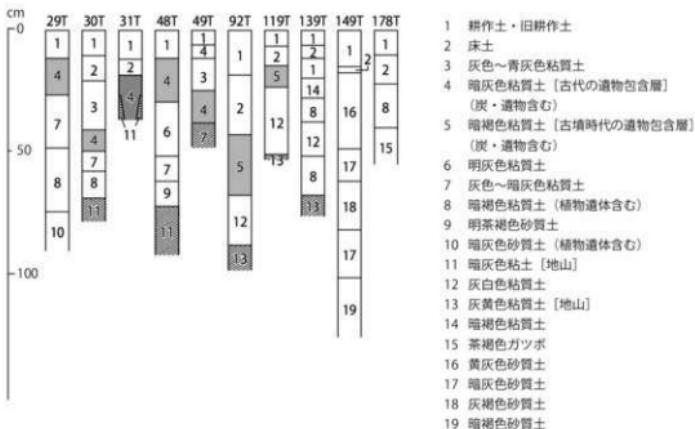
第3図 調査位置図 (1/50,000)



第4図 トレンチ配置図① (1/5,000)



第5図 トレンチ配置図② (1/5,000)



第6図 土層柱状図 (1/40)

調査の結果 排水路・バイオライン工事が予定される箇所及び面工事で削平が予定される箇所を中心に、 $1.5\text{ m} \times 2.0\text{ m}$ の試掘トレンチを 165 か所設定した(第4・5図)。土層は調査箇所により、大きく3つに分けられる(第6図)。丘陵裾部では粘質土を中心とした土層(ただし多くの場合、間層に植物腐植土層が入る)、丘陵の谷部では植物腐食土層を中心とした土層(耕作土すぐ下に植物腐植土が現れ、安定した基盤層が検出できない場合が多い)、旧島崎川治いでは砂層を中心とした土層(しばしば湧水を伴う)である。

調査の結果、31トレンチでピットを1基検出した。また、丘陵裾部の29・30・48・49トレンチで平安時代の遺物包含層を検出し、土師器・須恵器が定量出土した。これらの土器に交じり、竈の構築材と考えられる被熱した砂岩が大量に出土しており、住居跡等の生活遺構を作りう可能性が考えられる。46・47・50トレンチなど谷部に近い場所では包含層が認められることから、生活遺構は現在の集落の中に重なる範囲にあるものと推定した。その他、92トレンチで炭混りの遺物包含層を検出し、古墳時代の土師器の底部1点が出土した。119トレンチでも同様の遺物包含層の広がりが確認できた。

29・30・48・49トレンチの範囲を堤下遺跡、92・119トレンチの範囲を竹ノ沢遺跡として新遺跡に登録した。今後は上記2遺跡の取り扱いについて、引き続き県振興局と協議を行う予定である。



写真3 調査風景（掘削）



写真4 調査風景（埋戻し）



写真5 30トレンチ



写真6 31トレンチ



写真7 49トレンチ



写真8 92トレンチ



写真9 139トレンチ



写真10 178トレンチ



写真11 出土遺物(49トレンチ)

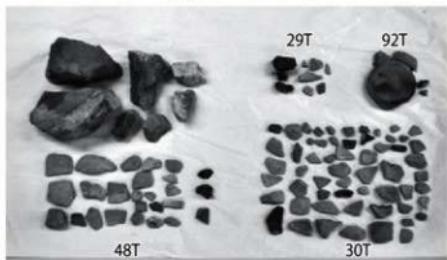


写真12 出土遺物(29・30・48・92トレンチ)

3 新保遺跡確認調査

調査地 長岡市深沢町 調査面積 14m² (対象面積 167.25m²)
調査期間 令和元年7月3日 調査担当 山賀和也

調査に至る経緯 平成30年7月30日に個人住宅建設に伴う埋蔵文化財の取扱いについて照会があった。照会地は新保遺跡の範囲内に位置することから、市教育委員会は確認調査を実施し、遺跡の内容を確認する必要があることを伝えた。その後、何度か協議を重ね、調査は設計計画の進捗に合わせて、令和元年度に実施することとした。

調査地の概要 調査地は信濃川左岸の段丘低位面の東端に位置しており、現在は宅地となっている。標高は約30mである。遺跡は宅地南側の水田部分までを含む範囲となっている。遺跡からは、水田から平安時代の須恵器が少量採集されている。調査地の西側の段丘上には、羽黒窯跡をはじめ古代の窯業遺跡が複数存在する。

調査の結果 調査対象地にトレンチを2ヶ所設定し、調査を行った。調査地には、以前に住宅が建っていたことから、そのことを考慮に入れて調査した。各トレンチでは、疊交じりの表土(1層)が10~15cm程度堆積し、その下には茶褐色土層をはさみ、黄褐色土層(3層)が堆積していた。調査地に構造・遺物は発見されなかったため、遺跡は存在しないと判断し、これ以上の調査は必要ないことを事業者に伝えた。



第7図 調査位置図 (1/40,000)



第8図 土層図 (1/20) 及びトレンチ配置図 (1/4,000)



写真13 調査前現況 (南から)



写真14 1T 土層断面 (東から)

4 江底遺跡確認調査

調査地 長岡市堺町 ほか

調査面積 38.4m² (対象面積 30,000m²)

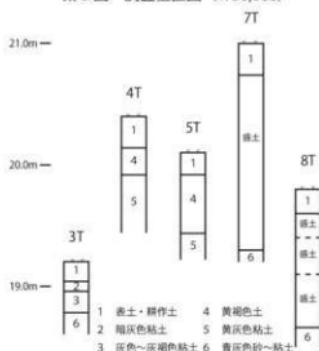
調査期間 令和元年 10月 23日

調査担当 山賀和也

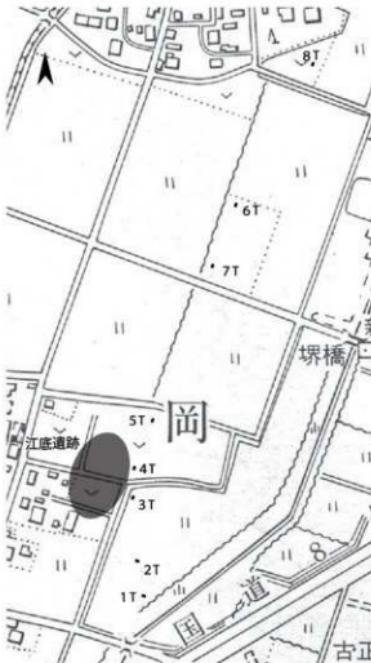
調査に至る経緯 平成 29 年 6 月 2 日に長岡市土木部道路建設課（以下、事業者）から左岸バイパス北部延伸道路整備事業計画に伴う埋蔵文化財の取扱いについて照会があった。事業予定地は、江底遺跡に接近するため、試掘確認調査を実施し、遺跡の広がりを確認し、今後の協議に資することとした。

調査地の概要 調査地は信濃川左岸に位置しており、標高は約 20 m である。遺跡は、信濃川の氾濫原に残された自然堤防上に位置しており、周辺の低地は信濃川の旧河道と推定されている。遺跡からは、平安時代の土師器・須恵器及び中世の珠洲焼が数点採集されているのみで詳細は不明である。事業予定地は、点在する自然堤防の端を通るルートが計画されている。

調査の結果 事業予定地内に任意で 8か所のトレンチを設定した。遺跡と同じ標高で畠地となっている 4・5T では、耕作土の下には、黄褐色土・黄灰色粘土が堆積していた。そのほか水田に設定したトレンチでは、耕作土の下に青灰色粘土が堆積していた。事業計画地に遭構・遺物は発見されなかったため、遺跡は広がらないと判断し、これ以上の調査は必要ないことを事業者に伝えた。



第10図 土層柱状図 (1/40)



第11図 トレンチ配置図 (1/5,000)

5 西片貝地区試掘調査

調査地 長岡市西片貝町

調査面積 22.7m² (対象面積 1,078m²)

調査期間 令和元年 7月 17 日

調査担当 烏居美栄

調査に至る経緯 令和元年 7 月、長岡市土木部道路建設課（以下、事業者という。）から長岡市教育委員会に市道柄吉 202 号線改良工事計画地における埋蔵文化財の取扱いについて照会があった。事業地は百間堤遺跡に近接しており、遺跡の広がりの確認が必要であることから協議を行った。協議の結果、事業者から重機及び作業員の提供を受けて試掘調査を行うことになった。

調査地の概要 調査地は、東山丘陵西裾にある成願寺町集落の北西の丘陵地に位置する。周辺には江戸時代に築かれた百間堤という溜池がある。その南側の平坦部の畑地において縄文時代の石器類、土器片や、須恵器・土師器片が採集され、百間堤遺跡として周知化されている。しかし、堤の構築によって地形が変化しており、遺跡の範囲は明瞭ではない。周辺の現状は畑または耕作放棄地であり、標高は約 81 m。平坦部の南側は高さ約 5 m の崖になっており、崖裾に猿橋川（成願寺川）が東から西に流れる。

調査結果 拡幅予定範囲の任意の箇所に調査トレーニチを 6 箇所設定し、バックホウ及び人力で掘削を行った。いずれのトレーニチからも遺構・遺物の出土はなかった。2・3 T の厚い黒色土層は、周辺が低く水はけが悪い状態であることから、耕作に係る埋土であろうか。事業地内に遺跡は所在しないと判断し、事業実施は支援ない旨を事業者に伝えた。



第 12 図 調査地位置図 (1/20,000)



第 13 図 トレーニチ配置図 (1/1,500) 及び土層柱状図 (1/30)

6 越路中沢地区試掘調査

調査地 長岡市越路中沢

調査面積 135.7m² (対象面積 13,000m²)

調査期間 令和元年4月23・24日

調査担当 新田康則

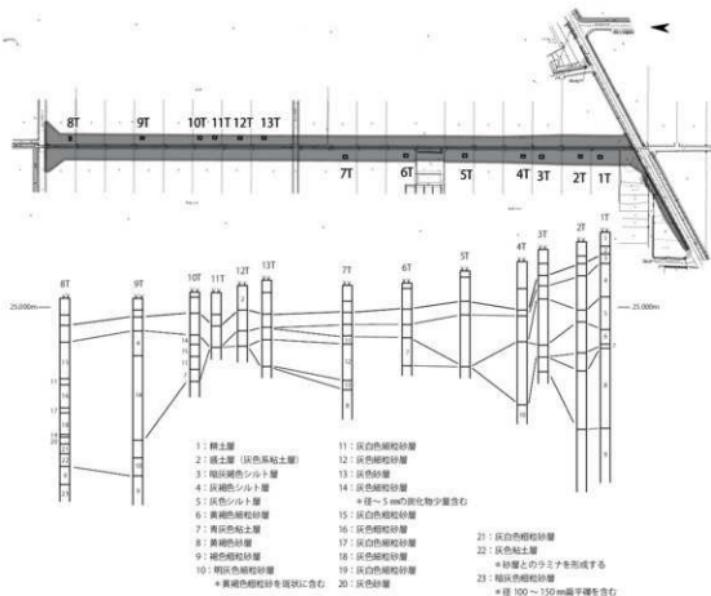
調査に至る経緯 平成29年4月26日、長岡市土木部道路建設課から、左岸バイパス南部延伸事業に係る埋蔵文化財についての照会があった。事業予定地には周知の遺跡は確認されていないが、沖積地において、未知の遺跡が包蔵されていることもあるため、試掘調査を実施して、遺跡の有無を確認することとした。

調査地の概要 信濃川左岸の沖積地に位置する。信濃川支流の渋海川と須川に挟まれており、島状に点在する自然堤防上に近世以降の集落が立地する。

調査の結果 13箇所のトレンチを設定して調査を行った。その結果、遺構・遺物ともに検出できず、当該地に遺跡が包蔵されている可能性は極めて低いと考えられる。このため、開発事業に係る更なる措置は必要ないと判断し、その旨を事業者に伝えた。



第14図 調査地位置 (1/25,000)



第15図 調査トレンチ配置図 (1/5,000)・土層柱状図 (1/40)

7 飯塚原地区試掘調査

調査地 長岡市飯塚

調査面積 297.6m² (対象面積 7,400m²)

調査期間 令和元年5月17・20日

調査担当 新田康則

調査に至る経緯 平成30年6月7日、寶徳山稻荷大社駐車場拡張工事に係る埋蔵文化財の取扱いについて照会があつた。事業地は、「越路町史」に縄文遺跡の伝承地(「飯塚原B遺跡」として記される地点に当たることから、現況盛土で造成することで協議を終えた。しかし、事業進行に伴い、事業者から計画を変更して切土を交えたいとの要望があつたため、変更設計案を基に試掘調査を実施して協議に資することとした。

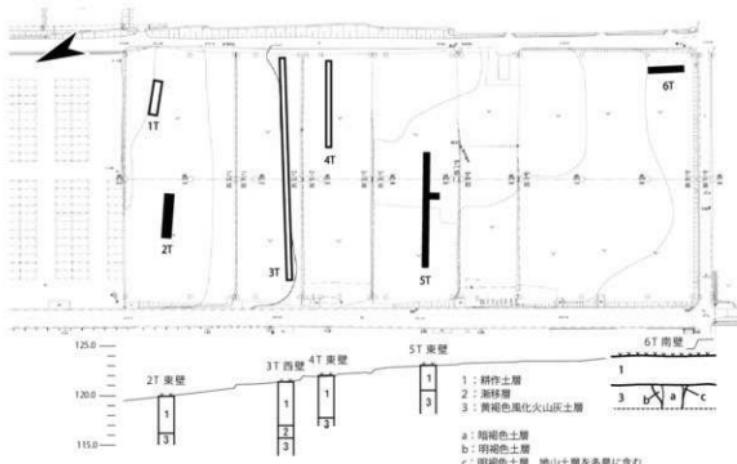
調査地の概要 信濃川左岸の越路原I段丘西縁にあり、南に向かって上がる緩斜面である。調査地の北には縄文時代中期の飯塚原A遺跡が所在する。

調査の結果 設計案において掘削影響範囲となる区域を対象に、6箇所のトレンチを設定して調査を行つた。その結果、おおむね黄褐色風化火山灰土層上部まで畑作による擾乱を受けていることを確認したが、2・5Tでは遺構プラン、6Tではトレンチ断面に遺構を検出した。中～近世の土器細片が広く分布することから、検出遺構は当該期の所産と推測される。特に5Tについては、トレンチ出土の遺物はなかったが、付近で珠洲焼片を採集しており、14～15世紀の建物群と判断されよう。

この調査結果を踏まえた協議により、2・5・6T付近を保護する内容で事業が実施設計が作成され、工事が実施された。



第16図 調査地位置 (1/20,000)



第17図 調査トレンチ配置図 (1/1,500)・土層柱状図 (1/40)

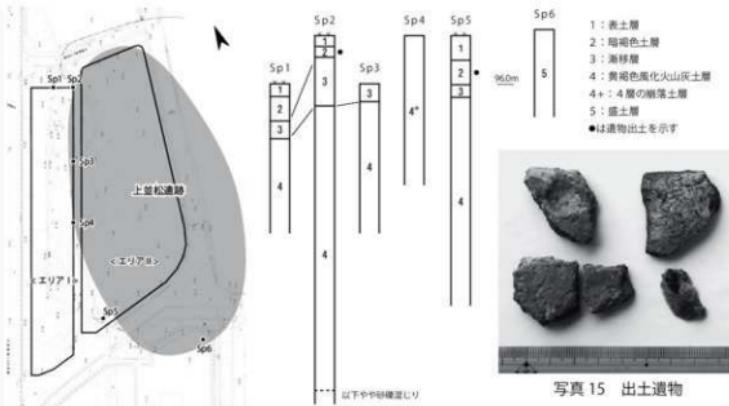
8 上並松遺跡隣接地立会調査

調査地 長岡市朝日 調査面積 2,200m² (対象面積 2,200m²)
調査期間 令和元年7月26日～10月3日 調査担当 新田康則

調査に至る経緯 平成29年9月27日、国際石油開発株式会社帝石から、同社越路原プラント駐車場における液化炭酸ガスプラント建設（以下A区）と、これに伴う代替駐車場造成（以下B区）に係る埋蔵文化財の取扱いについての照会があった。いずれも上並松遺跡の範囲にかかるが、A区については包含層相当層が削平を受けていることを既に確認しているため〔長岡市教育委員会2008.19〕、法93条による届出の後、立会調査を実施することとし、B区については上並松遺跡への影響が大きいため、用地選定を含めた事業計画の再検討を依頼した。結果、B区を遺跡西側のエリアI、段丘上（遺跡本体）のエリアIIとに分け、エリアIは基本谷の埋立によって造成し、エリアIIは現況の畑地を耐圧シート・砂利敷で整備して、遺跡を現状保存することとなった。そしてエリアIのうち、土留擁壁等による掘削箇所について、法93条による届出の後、立会調査を実施した。

調査地の概要 上並松遺跡は、信濃川左岸の越路原Ⅰ段丘の北縁部、権ヶ沢と呼ばれる開析谷に西面する。昭和40年代の越路原総合開発事業や、昭和50年代以降続く天然ガス関連事業等で、周辺は大きく地形変化されているが、遺跡はほぼ旧状を保っていると考えられている。

調査の結果 A区では平成19年度調査結果を追認した。一方、B区においては暗褐色土層中に縄文時代中期末葉に属する土器等を少量検出したが、これは流れ込みに類するものであろう。今回の調査結果からは、権ヶ沢側には捨て場遺構や水場遺構等は形成されなかったものと推測される。



第19図 調査区域 (1/2,000)

第20図 土層柱状図 (1/40) *土層柱状図に示す地表面は1/200で配置



写真15 出土遺物

9 朝日遺跡隣接地立会調査

調査地 長岡市来迎寺
調査期間 令和元年6月4・20日

調査面積 6m² (対象面積6m²)
調査担当 新田康則

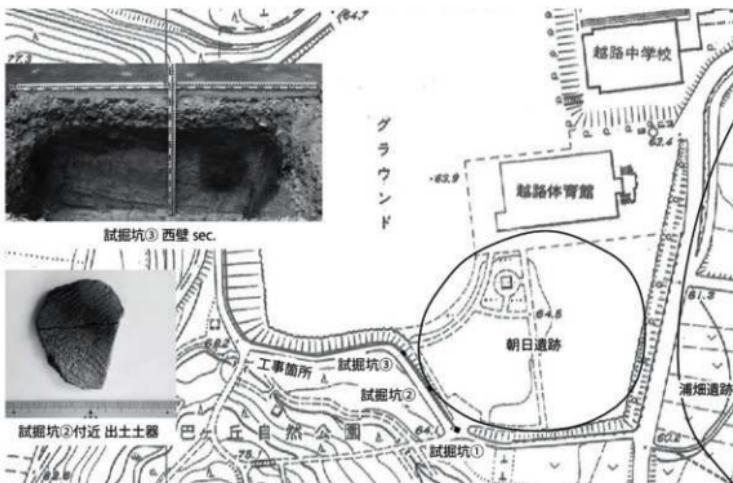
調査に至る経緯 令和元年5月7日、長岡市水道局から、配水管布設替工事に係る埋蔵文化財包蔵地の取扱いについての照会があった。照会地は朝日遺跡に隣接するが、工事規模と内容、そして平成28年に当調査地の東で実施した立会調査（長岡市教育委員会2017.11）と同様に、市道舗設によりローム層上部まで擾乱を受けている状況が予想されるため、管路位置確認のための試掘工事を以って、立会調査とすることとした。

調査地の概要 信濃川左岸に形成された越路原Ⅲ段丘上に位置する。調査地の北に位置する朝日遺跡は、昭和36年（1961）年、越路中学校建設に伴い発掘調査が実施され、縄文時代晚期の集落跡であることが確認されている〔越路町教育委員会1965〕。中学校建設に加え、その後、昭和54（1979）年には体育館も建設されており、遺跡の遺存状況は不明である。

調査の結果 試掘坑断面において遺構断面を確認した。ただし、予想どおり包含層は擾乱を受けている。遺構断面には縄文時代晚期所産の土器片が含まれており、朝日遺跡の広がりと捉えることができよう。この結果から、本工事における掘削は、可能な限り既存管布設時の振り込みをトレースして遺跡を保護するよう指示し、遺構断面検出エリアについては本工事の立会を行い、調査を終了した。



第21図 調査地位置 (1/50,000)



第22図 試掘坑配置図 (1/2,500) *遺構・遺物を検出した箇所のみ地点を落とした。

参考文献

越路町

1998『越路町史』資料編Ⅰ原始・古代・中世 越路町
越路町教育委員会

1965『朝日遺跡』越路町教育委員会
寺泊町

1992『寺泊町史』通史編上巻 寺泊町
長岡市

1992『長岡市史』資料編Ⅰ 考古 長岡市
長岡市教育委員会

2008『平成19年度長岡市内遺跡発掘調査報告書』長岡市教育委員会
2017『平成28年度長岡市内遺跡発掘調査報告書』長岡市教育委員会

渡邊裕之

2002「「朝日式土器」の再検討—延命寺ヶ原遺跡出土土器の検討をとおして—」『新潟県立歴史博物館研究紀要』
第3号 新潟県立歴史博物館 45-71頁

報告書抄録

ふりがな	れいわがんねんどうがおかしないいせきはっくつちょうさほうこくしょ					
書名	令和元年度長岡市内遺跡発掘調査報告書					
副書名						
巻次						
シリーズ名						
シリーズ番号						
編著者名	小林徹・加藤由美子・島崎美栄・新田康則・山賀和也					
編集機関	長岡市教育委員会					
所在地	〒 940-0084 新潟県長岡市幸町 2 丁目 1 番 1 号					
発行年月日	2020年3月27日					
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 度	調査期間	調査面積	調査原因
「みのり」城跡 堤下遺跡	新潟県長岡市寺泊大和町堤下 1527 番地 1 ほか	152021 1468	376183 1387741	2019.10.01 2019.10.30	150m ²	試掘調査
「たけの」城跡 竹ノ沢遺跡	新潟県長岡市寺泊年友 312 3 番地ほか	152021 1469	376184 1387847	2019.10.01 2019.10.30	60m ²	試掘調査
「しらかば」城跡 新保遺跡	新潟県長岡市深沢町 358 番地	152021 258	374091 1387831	2019.07.03 2019.07.03	140m ²	確認調査
「えぞ」城跡 江並遺跡	新潟県長岡市押野町 576-3 ほか	152021 228	374613 1388149	2019.10.23 2019.10.23	38.4m ²	確認調査
ふりがな 所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項	
「みのり」城跡 堤下遺跡	遺物包含地	古代	ピット	須恵器・土師器	なし	
「たけの」城跡 竹ノ沢遺跡	遺物包含地	古墳	なし	土師器	なし	
「しらかば」城跡 新保遺跡	遺物包含地	古代	なし	なし	なし	
「えぞ」城跡 江並遺跡	遺物包含地	古代・中世	なし	なし	なし	

令和元年度 長岡市内遺跡発掘調査報告書

令和2（2020）年3月27日 印刷

令和2（2020）年3月27日 発行

発 行 新潟県長岡市教育委員会

印 刷 株式会社第一印刷所